

『古今集』以後における貫之

菊地 靖彦

きく　ち　やす　ひこ
菊　地　靖　彦

昭和11年生。山形県長井市出身。

昭和36年東北大学大学院文学研究科修士課程修了。

現　在　一関工業高等専門学校教授。

主な論文（本書関係以外）

- 「古今集「俳諧歌」論」（『平安文学研究』44輯）。
 - 「後撰集における古今集歌人ならびに古今集撰歌範囲の歌について」（一関高専『研究紀要』11号）。
 - 「拾遺集部類考」（『平安文学研究』55輯）。
 - 「伊勢物語私論—主として伝承と反古今との視点から—」（『国語と国文学』49年11月号）。
- など。

現住所　021 岩手県一関市萩荘高梨南方19高専宿舎(一)2の1号。

『古今集』以後における貫之

検印省略

101	東京都千代田区猿樂町二一八一—三	昭和五十五年十一月一日	初版印刷
(株)桜楓社		昭和五十五年十一月五日	初版発行
(〇三)二九五—八七七一(代)		定価	四八〇〇円
振替 東京 六一—八〇二〇	印刷所 岩村田活版所	著者 菊地靖彦	
		発行者 及川篤二	

『古今集』以後における貫之

菊地靖彦

緒　　言

本書の内容は既発表の論文をもとしながら、今回あらたに書き下したものである。

第一章は「古今集以後における貫之の様相―屏風の歌を通して」（一関工業高等専門学校『研究紀要』二号、昭和43年3月）を礎稿としている。礎稿のおもかげをかなり残している。次に、『新撰和歌集』については、『新撰和歌集』論―その性格と問題点の検討―（『平安文学研究』三六輯、昭和41年6月）、『新撰和歌集』の構成について―その実態と意識―（一関工業高等専門学校『研究紀要』一号、昭和42年3月）の既発表論文があるが、第二章はそれらと直接の関係はない。ただし右のうち前者の意は本章にほぼ取り込んだつもりである。第三章の礎稿は「土左日記論」（『王朝』第七冊、昭和49年9月）であるが、その他の既発表論文の内容も繰り込み、構成も変えた。部分的には礎稿に通うところも多いが、全体としてはかなり違ったかたちとなった。

『古今集』以後における貫之」とする本書の問題意識からすれば、第一章はその全体にふれることであり、第二章、第三章はむしろ一つにまとまって第一章と相対し、相補う関係に立つはずのものである。しかし、『新撰和歌集』や『土左日記』について独立した論はどうしても必要なので、このような章分けとなった。終章は全体のまとめである。なお、『古今集』、およびそれ以前における貫之については、いずれ刊行する別著『古今的世界の研究』において論じた。本書の叙述に舌足らずのところがあるとすれば、それは同書と関連するからである。また、巻末

に付載した「校注新撰和歌集」は『校異新撰和歌集』（昭和40年刊）を全面的に改めたものである。校本としてはその後迫徹郎氏のすぐれた業績（『王朝文学の考証的研究』）がもたらされたが、各歌の収載文献の注記などを主として、簡便なテキストとしてなお利用価値があると考ええる。

いかにも貧しい一本ではあるが、本書をまとめるに至るまでに私を導き、励ましてくださった恩師、先輩、知友、同僚の方々に、心からの感謝を申しあげたい。殊には東北大学在学中より今日まで変ることなく御指導を賜っている菊田茂男先生に衷心からお礼を申しあげるものである。本書の出版もまたひとえに先生のお力添えがあつてのことであつた。そして、この困難な出版事情の下で、本書に対し特に深い御理解と御厚情を示された桜楓社社長及川篤二氏、道坂春雄氏、また直接の任にあたられた今井肇氏その他の方々にあらためて感謝の念を捧げたいと思う。

昭和五五年六月

菊 地 靖 彦

目次

緒言	3
第一章 屏風歌歌人貫之	7
第二章 『新撰和歌集』	73
第三章 『土左日記』	121
終章 『古今集』以後における貫之	171
*	
付載 校注新撰和歌集	183

第一章

屏風歌歌人貫之

『古今集』以後における貫之の活躍はなんといっても屏風歌歌人としてのそれが第一である。貫之の没年は天慶八年（九四五）と推定される。延喜五年（九〇五）以後、四〇年間に及ぶ。『後撰集』の撰進事業は天曆五年（九五二）に開始されたと思われるから、『古今集』から『後撰集』へ至る間をほとんどカバーするのが貫之の作歌活動であったことになる。

貫之の『古今集』以後四〇年間の活動には、中に一つの途切れがある。延長八年から承平五年（九三〇—九三五）の土佐赴任である。その期間を境として、これを前期と後期とに分けて考えることは、藤岡忠美氏の提起¹⁾以来ほぼ定説になっている。前期は宮廷を中心に、後期は藤原権門を中心にその活躍の場を異にするからである。本書でもこの区分に従いたいと思う。そしてまた、『新撰和歌集』と『土佐日記』とをもちがした土佐赴任は、貫之においてそれなりの転機となったこともたしかだからである。

さて、萩谷朴氏の「貫之全歌集」（日本古典全書『新訂土佐日記』所収）によれば、現存する貫之の屏風歌は四二種五三九首となる。これは現存する貫之歌の過半数である。その々についてはなお多少の問題は残ろうが、いまは「全歌集」に従って一覧表を作製すると次のようになる。『拾遺集』、『新古今集』の入集歌数も付して示す。

(第1表)

番号	詞	書	実歌数拾遺歌		新古今歌
前					
1	延喜五年二月廿一日、尚侍の奉らるる泉の右大将の四十の賀の時の屏風の歌、内裏の仰せによつて奉る(1—2)		二	二	
2	延喜六年、月次の屏風八帖が料の歌、四十五首、宣旨にてこれを奉る、廿首(3—22)		二〇	九	四
3	延喜十三年十月十四日、尚侍の四十の賀の屏風の歌、内裏の仰せにて奉る(23—28)		六	一	
4	延喜十四年二月廿五日、女一宮の御屏風の料の歌、亭子院の仰せによりて奉る(29—43)		一五	二	
5	延喜十五年閏二月廿五日、斎院の御屏風の和歌、内裏の仰せによりて奉る(44—50)		七	三	二
6	延喜十五年十二月三日、保忠の右大弁ら故中御門の左の大臣殿の北の方の御為に五十の賀奉らるる時の屏風の歌(51—55)		五		
7	延喜十五年九月二十二日、右大将殿の六十の賀、清和の七宮の御息所のつかうまつり給ひける時の屏風の料の歌四首(56—59)		四	一	
8	延喜十六年、斎院の御屏風の料の歌、内裏より仰せうけ給はりて、六首(60—65)		六	三	
9	延喜十七年八月、宣旨によりて(66—89)		二四		
10	延喜十七年の冬、中務の宮の御屏風の歌(90—96)		七	二	
11	延喜十八年二月、女四の宮の御髪上げの御屏風の歌、内裏の仰せによりて奉る、八首(97—104)		八	二	
12	延喜十八年四月廿六日、東宮の御屏風の料に、歌八首(105—112)		八		
13	延喜十八年承香殿の女御の屏風の歌仰せによりて奉る。十四首(113—126)		一四	四	
期					

23	22	後 期	別 3	別 2	21	20	19	18	17	16	15	別 1	14
承平五年九月、東三条の親王の、清和の七の親王の御息所の八十の賀せらるる時の屏風の歌 (318—322)	承平五年十二月、内裏の御屏風の歌、仰せによりて奉る(322—332)		(延長二—承平二年) 三条の右の大臣殿の屏風の歌(199—217)	延喜の末よりこなた、延長七年よりあなた、内裏の仰せにて御屏風の歌、廿七首(280—317)	延長七年十月十四日、女八の宮、陽成院の一の親王の四十の賀つかうまつる時の屏風、調せ させ給ふ。仰せにてつかうまつる(268—279)	(延長六、七年) 京極の権中納言の屏風の料の歌、廿首(248—267)	延長六年、中宮の御屏風の歌、四首。右近権の中將うけたまはりて(241—247)	十一首(188—198)	延長四年八月廿四日、清貴の民部の卿の六十の賀、恒佐の中納言の北の方まゐらせらるる時の屏風の歌(173—187)	延長二年、左の大臣殿の北の方の四十の賀の御屏風の歌、十二首(161—172)	延喜二年五月、中宮の御屏風の和歌、廿二首(139—160)	(延喜年間) 延喜の御時、内裏の御屏風の歌、廿六首(218—243)	延喜十九年春、東宮の御息所の御屏風の歌、内裏より召しし十二首(127—138)
一〇	五		一九	三八	一二	二〇	四	一一	一五	一二	二三	二六	一二
	一		一		三			一	二	四	一	一	
			一	二	一	二		二		一			

24	承平六年春、左大臣殿の御親子、おなじところに住み給ひけるへだての御障子に、松と竹とを描かせ給ひて上り給ふ(333—334)	二	
25	おなじ六年、左大臣殿の五郎の侍従の屏風の歌(335—338)	一四	一
26	おなじ六年春、左衛門の督殿の屏風の歌(339)	一	
27	おなじ年の夏、八条の右大将の北の方、本院の北の方の七十の賀し給ふ時の御屏風の歌、大將仰せ給ふ時に(340—350)	一一	
28	承平七年正月、内裏の仰せにて(351—354)	四	
29	おなじ七年、右大臣殿の屏風の歌(355—373)	一九	三
30	天慶二年四月、右大将殿の御屏風の歌、廿首(374—395)	二二	一
31	同年閏七月、右衛門の督殿の屏風の料、十五首(396—409)	一四	一一
32	おなじ年、宰相の中將の屏風の歌、廿三首(421—455)	三三	二
33	同じ四年正月、右大将殿の御屏風の歌、十二首(456—466)	一一	一
34	おなじ年三月、内裏の御屏風の料の歌、廿八首(467—494)	二八	
35	同じ五年、亭子院の御屏風の料に歌廿首(495—513)	一九	一
36	おなじ年九月、内裏の御屏風の歌、五首(514—518)	五	
37	おなじ八年二月、内裏の御屏風の料、十首(530—539)	一〇	一
別4	(天慶年間)おなじ御時の内裏の仰せごとにて(410—423)	一四	
別5	おなじ年四月の内侍の屏風の歌、十二首(519—529)	一一	

注：別1から別5は年時の確定できないものである。「全歌集」の頭注を中心にして説明すると次の通りである。

別1「延喜の御時」は「醍醐天皇の御代といふ意味だが」、「延喜年間と限定されるかもしれない。」という。

別2 特に説明を要しない。

別3 三條の右の大臣殿」は右大臣藤原定方。「延長二年（九二四）正月右大臣となり、承平二年（九三二）八月六十歳で薨去した。」、したがってこの屏風歌は、延長二年から承平二年までの間に詠作されたことになる。

別4 〽おなじ御時」は「天慶年間。朱雀天皇の御代。」である。

別5 〽おなじ年」は前文、すなわち36を承けると「天慶五年となるが、五一四番の詞書に既に「九月」とあって、その後に「四月」の来ること不審。六年もしくは七年の四月か。内侍は誰か明らかでない。実頼の女、慶子か。」とある。よって一応天慶五年からはずしてここに位置させた。

なお、15の「延喜二年」は「延長二年」の誤り。萩谷氏も「全歌集」の頭注ではまだ疑いを残しておられるが、『土佐日記全注釈』（四六六）では「延長」と断定。田中喜美春氏（古今集延喜五年泰覧考（下））（『国語と国文学』昭48・2）、村瀬敏夫氏（『古今集の基盤と周辺』二四二頁、注2）も「延長」とされる。

さて、この屏風歌は『古今集』以後の勅撰和歌集が当然撰歌の対象としたはずである。もっとも『後撰集』は屏風歌を採らず、また『後拾遺集』までは貫之の歌を採らない。結局八代集では『拾遺集』と『新古今集』である。

そしてこの兩集への入集率を調べてみると、前期に多く後期に少ない。すなわち前期は三五五首中『拾遺集』歌四二首、『新古今集』歌一五首で、入集率は一五・五%、後期は二三二首中『拾遺集』一〇首、『新古今集』六首で、七・二%となっている。しかしこれは前期と後期との違いというのではなくて、実は時の経過とともに漸次入集率が小さくなっていくのである。それはいま、後期一一年間に見合うように前期を延喜一八年までとそれ以後と、それぞれ一四年間ずつに二分してみるとわかる。すなわち、二七・八%、一一・二%、そして七・二%ということに

なるからである。

この、『古今集』以後時を経るにつれて『拾遺集』、『新古今集』に入るような歌が少なくなっていく——ということは、なんととっても『古今集』以後の貫之を考えていく際の第一の手がかりになるであろう。それはいろいろなことを考えさせる。まず、『拾遺集』、『新古今集』に入るような歌は、やはり『古今集』風の正統な継承を示す歌であろう。つまりそれは『古今集』以後における貫之の秀歌とみてよいものである。もとより『古今集』歌と『拾遺集』歌とは傾向を異にする。しかし『古今集』直後にこそ『拾遺集』歌が多いということ、すなわち『古今集』歌と『拾遺集』歌とは時間的に近接するものであることは、確認されてよいのである。それに、『拾遺集』、『新古今集』に入集するような歌は、貫之自身からしても高く評価されるような歌であったと考えられる。それは『新撰和歌集』において、『古今集』以外から撰収された歌でもっとも多いのが『拾遺集』に入る歌一七首であり、『新古今集』に入る歌も七首と少ないことでもわかる。また貫之はこの集に『古今集』以後の自作の屏風歌を九首収めているが、そのうち六首は『拾遺集』に入る歌であり、一首は『新古今集』に入るもので、いずれにも入らないものは二首にすぎない。すなわち、貫之が自作に与えた評価と、『拾遺集』、『新古今集』が貫之の歌に対する目とはへだたてはいいないのである。つまり、貫之は『古今集』以後、次第に自他共に許す秀歌を生み出すことが少なくなっていくとみてよいことになる。それがどういう理由によるかということが、まずたずねられなければならないであろう。

同時にまた、ここでは屏風歌というものの性格が十分考えられなければならないであろう。『拾遺集』、『新古今集』に入るような歌が次第に少なくなっていくことは、屏風そのものが何らかの変化を遂げていったからかもしれないからである。そしてまた、『古今集』歌とはやや傾向を異にする『拾遺集』歌が『古今集』直後の屏風

歌においてこそ多く詠まれることは、屏風歌がそもそも『拾遺集』的なものを導くものであったこと、換言すれば、『古今集』的なものが『拾遺集』的なものへ移行することが、ただ単なる時間の経過による変化なのではなく、屏風という特別な媒体によってであったことも考えなければならぬであろう。いずれにせよ、ここには『古今集』以後の貫之を考えていく最初の手がかりがあることはたしかである。

二

延喜五年を起点として、次第に秀歌が少なくなっていく、ということとは、実際にいえることかどうか。それは実作についてみてみなければならぬであろう。

まず、同じ題材を扱った歌についてみる。たとえば秋の代表的な画題である七夕についての歌である。以下ゴシック数字は第1表の屏風番号である。また歌番号は「全歌集」のそれである。

〔前期〕

12 織女にぬぎてかしつる唐衣いとど涙に袖やぬれなむ (2、『拾遺集』夏149)

13 秋風に夜のふけゆけば天の川河瀬に波の立ちることそまで (2、『拾遺集』秋143、『新撰和歌集』18)

108 天の川夜深く君は渡るとも人知れずとは思はざらなむ (12)

230 世をうみてわがかす糸は七夕の涙の玉の緒とやなるらむ (別1、『拾遺集』雑秋1087、読人しらず)

231 まことかと見れども見えぬ織女は空になき名を立てるなるべし (別1)

152 人知れず空を眺めて天の川波うちつけにものをこそ思へ (15)